

子どもたちの「ふくしまへの想い」の実現を応援します！

# 「ふくしまの未来」へ つなぐ 体験応援事業

〈令和3年度〉実践事例集



アートで被災地を元気に！  
被災地の小中学校に  
元気を届けました



地域の「うんめえ」食材を  
使ったお弁当を創作！  
知事にも届けました



被災地の生の声を聞き、  
福島復興のために  
できることを考えました



リモートで県外の  
高校生との意見交流。  
お互いの地域の良さを生かした  
商品開発を行いました



# ふくしまの復興に貢献したい！ 一步ふみだす子どもたちを応援します！

## 事業概要

東日本大震災から11年が過ぎ、震災を体験、記憶していない子どもたちが増えてきています。福島県では、「ふくしまの未来に向けた創造的復興教育」を実施し、新生ふくしまを担うたくましい子どもたちの育成を図っています。

この事業では、復興を教材とした福島ならではの社会体験活動・社会貢献活動を推進し、復興に貢献しようという想いを高めています。また、その想いを具現化し、主体的に復興の発信や教訓の継承等に寄与する社会体験活動を県内外で広く行うことで、子どもたちの「志」を育み、復興・地域創生の担い手を育成する事業です。

### 採択条件

子どもたちが主体となって自ら考え、判断し、行動を起こす社会体験活動・社会貢献活動や地域の復興を支援する取組等で、以下のいずれかに係る事業とします。

- (1) 被災者や避難者、復興関係者、支援者等との交流活動等の取組
- (2) 地域の復興を考え、県内や他県、海外等へ復興をアピールする取組
- (3) 地域の将来を見据え、地域活性化を実現する取組

### 補助事業者

福島県内に主たる活動拠点があり、県内に事務所を有し、地域において青少年育成活動に取り組んでいる実績を有している団体(市町村、国公立学校、PTA、NPO等)

補助額

事業1 50万円

事業2 200万円

※補助金額は、補助対象経費の8/10以内。

※上記とは別に海外渡航費として海外渡航に関わる経費の8/10以内(100万円を上限)で認めます。

1

### 元気を届ける 交流・体験事業

- 避難者や被災者との交流を通して、子どもたちが元気を創出する活動

例

- ・ 仮設住宅、復興住宅等訪問及び被災者、避難者との交流 等



アクティブ・ラーニングを実施

復興を教材とした課題解決型学習

2

### 今を知り 思いを伝える事業

- ① ふくしまの「今を知る」活動
  - ② 復興への「思いを伝える」活動
- ※①②のどちらも行うことが必須

例

- ・ 被災地や震災関連施設等の訪問や被災者、避難者との交流・協働 等
- ・ 地域の復興を考え、県内外への発信を行う活動や復興へ向けた取組や現状、ふくしまの元気や地域の特色の発信 等

### 育成したい資質・能力

地域への誇り

自立心

創造性

社会性

困難を乗り越える力

実行力

郷土愛

自己肯定感の高まり

✦ 新生ふくしまを担うたくましい子どもたちの育成 ✦

✦ 福島ならではの教育として全県で推進 ✦

## 事業実績

令和3年度は、のべ24団体からご応募いただきました。

★〈採択団体〉20団体 ●〈事業1〉1団体 ●〈事業2〉19団体 となりました。



# ふくしまの元気を届ける交流・体験事業

## 事業名 出張! デザカ・2021

福島県立福島西高等学校 美術部

事業概要

デザイン科学科ビジュアルデザイン(VD)コースでは、美術部の活動として実施する「社会と関わるデザイン」の中で、近隣の小学校や中学校を訪問して美術やデザインのおもしろさを伝えることを主目的とした「出張!デザカ」に取り組んでいる。今年度は浪江町立なみえ創成小学校・中学校への訪問活動を実施した。

取組内容

「出張!デザカ・2021inなみえ創成小学校・中学校」浪江町の小学生、中学生に、美術やデザインの楽しさや面白さを伝えながら、高校生を身近に感じてもらうという取組です。

- ①黒板アート、立体作品制作
- ②「出張!ミニ西高デザ科展」
- ③プロモーション動画制作と子どもたちの鑑賞
- ④ホワイトボードアート制作
- ⑤SDGsについて子どもたちに伝え、カードを贈る



この事業のポイント

### この事業のポイント

「大好きな美術やデザインを社会でどう生かせるのか」ということを常に考えながら、私たちは毎日の制作に励んでいます。今回の出張活動は、デザイン科学科の1年生が、浪江町の小学生や中学生に楽しんでもらうために企画しました。浪江町の歴史や産業、震災後から今までの状況について調べ、みんなで協力して制作したので、喜んでいただける活動になったのではないかと思います。

# 今を知り思いを伝える事業

## 事業名 伝えよう!わたしたちの「ふくしま」

福島市立福島第三小学校 第6学年

事業概要

下郷町大内宿を中心にした研修活動を通して、県内において、震災を乗り越えてたくましく生きる人々の姿や、地域、産業の復興の現状を自分たちで調べ、郷土である福島に誇りをもつことができる。

取組内容

愛知県豊橋市立羽根井小学校の6年生と交流し、福島の復興の今を伝える活動を通して、復興の現状について知るとともに、郷土への愛着を深めることができた。また、下郷町で震災による風評被害を乗り越えて頑張っている人々とふれ合うことで、復興までの道のりについて理解することができるとともに、自分自身も今後、困難を乗り越えて生きていこうとする態度を育てることができた。



この事業のポイント

### この事業のポイント

今回のような学びの履歴を生かし、地域から福島県全体に目を向け、復興までの道のりや現状、人々の努力について調べ、さらに県外にも伝えていきたい。そうすることで、今後の自分の生き方についても考え、郷土への愛着を深めることができる。

## 事業名

# 復興から10年、力強い歩みで、地域の復興とみんなを元気にしよう! 福島県立ふたば未来学園高等学校 社会起業部

## 「変革者たれ」 ☆新しい価値の創造者への挑戦 プロジェクト☆

### 事業概要

震災から11年がたった今、ふたば未来学園にも原子力災害で地元(双葉郡)に住めなくなった生徒もいるが、確かな未来を描き進んでいる。その子供たちが福島の今を正確に分析し、確かな情報を広く伝える。

さらにこれまで災害や震災にあった子供たちとの交流会を実施し、現状を解決する知恵と勇気と実行力を醸成することを目的とする。

### 取組内容

宮城県(気仙沼、石巻)や熊本県(水俣)、において、東日本大震災で被害を受けた地区を中心に、福島県の復興状況や食の安全、フルーツを試食していただき、福島県の安全性をPRする。

福島県の現状をPRし、福島県の食材を使った豚汁を食べてもらい福島県産リンゴも試食していただくことができた。



### この事業のポイント

#### この事業のポイント

全国の人々(メディア、SNSを活用)や、宮城県(石巻市、気仙沼市)、熊本県(水俣市)の子供たちに、福島県で生活する高校生の現状を理解してもらい、立場にこだわらず対話することで、偏見や差別、ねたみ等に負けず、自分の未来を確かなものとするために、思考し判断し表現することで、未来を切り開くための力を備える人材になることができる。さらに福島県産食材のおいしさと安全性をPRできる。

## 事業名

# “大熊・堂島”交流を通しての 未来の人材育成プロジェクト

## 喜多方市立堂島小学校 父母と教師の会

### 事業概要

地域の起業家と連携し、被災地の大熊町と地元堂島の特産物を生かし、栄養バランスに考慮した健康でふるさとのよさを表した弁当を作成しそれを売り出す。

販売においては、健康に関する情報である食材の栄養素やお弁当のメニュー、さらにはふるさと堂島と大熊の魅力の入ったパッケージやPRハッピーなどを作成した。

### 取組内容

- 商品開発する際の心構えの学習。
- ふるさと自慢健康弁当のレシピの考案。
- ふるさと堂島と大熊のよさや特色を見出し、それを基にしたパッケージやハッピーの作成。
- できあがった弁当の販売。



### この事業のポイント

#### この事業のポイント

堂島と大熊の子どもたちが協働し、互いの地域の魅力を見出しながら、地域の起業家と連携してお弁当という形で表現したこと。



**事業概要**

福島の有志の高校生が、訪問やワークショップなどとおして被災地と関わり、その想いをアート要素を取り入れたワークショップで描きながら、自分自身についての更なる発見や深堀りをおこないます。

**取組内容**

高校生が自分の想いややりたいことと向きあうために一社ELABが展開する主体性・創造性に働きかけるプログラム「EGAKU」アートワークショップを3回実施しました。

アートの創作・鑑賞により自己認知を深めたり表現力、コミュニケーション力を伸ばしたりすることをサポートしました。


**この事業のポイント**
**この事業のポイント**

震災を経験した福島の高校生たちが不確実な未来を主体的に切り拓く力やコミュニティを牽引するリーダーシップをもって今後活躍するために、アートの創作・鑑賞により自己認知や他者承認を深め、自分の中にあるモヤモヤや課題意識と向き合う「アートワークショップ」を体験し想いを発信します。

**事業概要**

葛尾村では2016年6月に一部地域を残し避難解除が行われた。しかし、2020年度の帰村者は震災前の約1500人に対し300人ほどである。また、高齢者率は47パーセントとなっている。今後、震災前から震災後を通じて、村の震災と復興の記憶をつないでいく世代がない。

本事業では、次世代が少なくなった被災地葛尾村をフィールドに、高校生が葛尾村の震災と復興の記憶を葛尾村住民へインタビューし、演劇という手法で発信を行っていく。高校生による震災と復興の記憶の保存と発信をもって被災地の活性化に寄与することを目的にしている。

**取組内容**
**【取組①葛尾村の震災と復興の記憶の保存活動】**

参加する高校生が震災と復興の記憶を知り、住民と関係構築をするためにインタビューを行い演劇を創作する。

**【取組②葛尾村の震災と復興の記憶の発信活動】**

インタビュー時に得た葛尾村の震災と復興の記憶をもとに、葛尾村の住民と、演劇の一つ創作する。


**この事業のポイント**
**この事業のポイント**

地域の震災と復興の記憶は、文字におこし発信するとその思いはなかなか伝わりづらい。そこで、演劇という手法を用いて、よりリアリティをもって伝えられる。

## 事業名 相馬中村 ふるさとActionプロジェクト

MJCアンサンブル

### 事業概要

#### 活動1:ふくしまの今を知る活動

江戸時代から受け継がれている国指定武山家住宅において、地域の歴史と民俗文化を知る活動を「下町子供手踊り保存会」と協力して開催。また、上真野小学校との江戸時代生活体験を実施。加えて私たちの震災体験をテーマとした朗読劇を作成。

#### 活動2:音楽で思いをつたえる活動

移民のルーツである富山県南砺市と南相馬市野馬追通り銘醸館での音楽交流活動や朗読劇の上演を実施。

### 取組内容

- ①南相馬市において地域の方と交流
- ②震災体験を知る活動
- ③相馬地方の民謡・民俗芸能を体験する活動
- ④富山県南砺市との交流、歴史文化活動
- ⑤野馬追銘醸館と南砺市での上演(朗読劇 音楽での活動演奏)



### この事業のポイント

実体験から歴史や文化、震災体験の共有など、学びきっかけ作りを重視した協働活動。  
震災体験朗読劇「標」上演の際はレパートリー曲を盛り込むなど工夫をおこなった。

## 事業名 高校生が震災の教訓を伝えるプロジェクト

福島県立新地高等学校  
生徒会

### 事業概要

- ①東日本大震災で甚大な津波被害を受けた新地町の震災の記憶を風化させないことを目的とした活動である「おもひの木プロジェクト」を通して、高校生の立場から震災の月命日での追悼行事を企画・実施をすることで全校生徒に命の尊さを伝え、防災教育へとつなげる。
- ②浜通りの被災地の視察や宮城・岩手・山形の高校生との交流を通じ、復興の状況について情報を交換しながら、震災の記憶を後世へつなげ、本県の風評払拭のための活動を行い、同時にWebページ・SNS、マスメディア等を活用し、情報発信を行う。
- ③追悼祈念樹「おもひの木」に関連して作製したロゴを使用した記念品を製作、本校生徒による「おもひの木プロジェクト」活動やボランティア活動等を通して配布し福島の復興につなげる。
- ④新地町まちづくり事業や町内文化祭・産業祭、町内のイベント等にも参加して、「おもひの木プロジェクト」の活動を紹介、情報発信を行う。

### 取組内容

東日本大震災の月命日の11日前後に、全校生徒で震災の風化防止・命の尊さについて再確認する追悼行事を行った。また、同時に町内の国道6号線にかかる地下道と新地駅前トイレの清掃活動を行った。地元の語り部から震災時の様子を聞き、自分事化する機会を持った。日本青年会議所による福島ブロック第51回福島ブロック大会in相馬では、「おもひの木プロジェクト」に関する発表を行った。「おもひの木プロジェクト」に関わっていただいた外部講師等に配布する記念品のエコバッグを製作した。今後、県内外の高校生との交流では、「おもひの木プロジェクト」の活動内容について発表予定である。



### この事業のポイント

月命日での追悼行事と町内の清掃活動。「おもひの木プロジェクト」にかかるオリジナルエコバッグの製作。



事業概要

- 地域の復興を考え県内外で被災地の現状等について伝え、震災の風化を防止する活動。
- 東日本大震災後のふるさと国見町を学び、学年の異なる児童生徒や地域等との元気を発信する交流活動を通して、自ら考え、自ら判断し、自ら行動を起こすことができるふるさとに愛着を持つジュニアリーダーを育成する。

取組内容

【アカリを学ぶ】

- 「アカリ」は藤田駅前にある古い倉庫を官民一体となり、リノベーションした国見町の復興の象徴。
- 創業者や地域起こし協力隊へのインタビュー実施。
- アカリ内を撮影した写真・動画をもとに、団員が編集作業を行い、紹介動画を作成。



この事業のポイント

この事業のポイント

ジュニア応援団が主体となり、創業者へのインタビュー、写真・動画撮影、動画の編集を実施。作成した動画はユーチューブにアップし、岐阜県池田町ジュニアリーダーズクラブとのZoom交流にて、披露した。

事業概要

- ① 福島第一原子力発電所内に保管されている処理水の海洋放出について、福島県内の高校生が事前調査を行ったうえでディベート形式の会議を開催し、原発事故および福島の実状を理解する。
- ② 高校生や地元住民、地元自治体の首長や行政機関と、意見交換や交流を行うことで、それぞれの価値観の共有と視野の拡大を実現し、地域課題の「自分事」化を図る。
- ③ SNSなどのメディアを用いて、情報発信を行う。本事業内で情報が完結するのではなく、全世界に向けて福島の直面する課題と復興の必要性を訴え、福島の実状に関する正しい認識などを一次情報に近い形で発信することで課題の再確認や風評被害の払拭につなげる。
- ④ 事後調査やまとめ作業を通じたアウトプットとリフレクションにより、高校生がより理解を深められるようにする。また、成果物として小冊子の作成や、首長・行政機関に向けた提言を作成する。

取組内容

6名の講師(大学教授2名、経済産業省、双葉町長、双葉郡の生産者)と意見交換し、東京電力福島第一原子力発電所を見学することにより、被災地の状況と(汚染水対策を含む)廃炉作業について理解し課題を見つけることが出来た。これらから学んだことと課題の取り組み方について関係者に発表した。今後は、活動報告書を作成し、関係機関への提言書をまとめる。



この事業のポイント

この事業のポイント

被災地を実際に訪問することで、(廃炉を含む)復興について「自分事」できる環境を提供。これまでの本法人の活動取り組みと被災地双葉郡(浜通り)ならではの人的ネットワーク。

## 事業概要

東日本大震災と原発事故から11年が経過し、震災の記憶が風化してきている。避難を余儀なくされた障害者就労支援事業所との交流をとおして、「誰一人置き去りにしない」持続可能でインクルーシブな社会の実現を学ぶ。さらに多様な人々と協働しながら、ふくしまを考え暮らしから地域からSDGs達成に取り組む。

## 取組内容

- 1 パートナーシップで社会的課題の解決
  - 被災地より避難してきた障がい者の支援
- 2 地域資源 豊かな水を継承する活動
  - ふくしまの食や文化体験、紙芝居の制作
- 3 復興イベントに参加し今を知り、ふくしまの魅力をPR
  - 「復興の軌跡とこの先の挑戦」で基調講演



## この事業のポイント

## この事業のポイント

障害者就労支援事業所との交流をとおして人と人が繋がり、様々な応援を受け、多くの人たちと協働し活動することができた。多様な経験、世代を超えたコミュニケーションから多様性や地域理解、郷土愛・誇りを培い、福島県の未来を自分事としてとらえ、ローカルSDGs実践の学びの場となった。部活動の取り組みから学年、学校への取り組みに波及し、今後も交流活動を継続させていきたい。

## 事業概要

新型コロナウイルス感染症の影響で行動制限がある中でも歌と同時に行ってきた「震災学習」の表現を中核として、新しい生活様式を基本とし積極的な発信活動を目的に、各地へ直接赴き交流し、より多くの方々に合唱や劇を見ていただくことで元気を届ける。

## 取組内容

- ①新型コロナウイルスの影響で今まで交流のあった方々へ会いに行けない活動の中、子ども達自身のアイデアで作成したプレゼントを届け、発信・交流を図る手立てとした。
- ②今まで交流してきた方々へ子ども達が企画した活動を通して直接発信活動を実施した。
- ③夏・冬の2回ネット配信を通して、離れている方々に発信し、また交流のある被災地の方々にも歌を届けた。
- ④被災各地取材を通し団員の目線でまとめた震災MAP作成や、県内外の方々へ震災学習をコーディネートし、震災遺構施設見学や語りべ講話から学んだ防災減災の情報も加えた発信用冊子を使い交流発信活動を行った。



## この事業のポイント

## この事業のポイント

音楽を中核とした各活動を通じて、子どもたちの発する問題提起により、大震災の持つ生活への影響、子どもたちの人間関係への影響等を見る人に考えさせ、少しでも風化を防ぐ効果と共に子供の目線で見て聞いて、福島県の震災の根深さを知り、震災を自分のものと考えさせる契機になり、自分の言葉で発信できるアイデアと心の成長が期待できる。

創作絵本や震災MAPを作成、配布することにより、少なからず震災の影響を受けている子ども達の心の整理や、被災当事者の吐き出しの形を設定する。震災後活動を続けてきた軌跡を個々に確認する一助とし今後の活動の源となり、被災地の方々との継続的な交流が、地域とのつながりと絆になっている。



## 事業概要

福島大学が支援する「地方創生イノベーションスクール2030」に参加する生徒たちが、福島の将来を「なんとかしたい」という仲間を募り「ふくしまにぎわいらボ」を生徒主体で組織した。

生徒は、OECD連携事業「きょうそうさんかくたんけんねつ」に参加し、社会の現実的な問題解決に取り組むことによって、行動力、コミュニケーション力、情報伝達能力、適応能力、考え方の多様化などこれから必要とされる能力を伸長させる。

生徒が主体となり、東日本大震災以降の福島の置かれている現状と希望を県内外の同世代や海外の生徒や研究者へ共有し、地域の課題に対して世界規模で臨む新しい教育プラットフォームの開発を進め、それを福島発として世界に提案する。

## 取組内容

中学生メンバーが中心となって組織した「ふくしまにぎわいらボ」はOECDから正式に支援をいただけることとなり、カザフスタンやエストニアなど海外と一緒に運用するプラットフォームの開発がスタートし、国際的な規模の組織として「FutureLab」へと名称を変更した。

FutureLabが総合の時間をサポートする県内の小学校は、総務省採択事業「異能バージョン」のジェネレーションアワードを受賞。福島市を創る高校生ネットワークの高校生も合流し、県内外の他地域の同世代との交流も行い、福島の現状と震災後の学びを広く伝えながら、共に互いの課題を解決するコミュニティの基礎を構築した。



## この事業のポイント

## この事業のポイント

ふくしまから伝えたいこと、小中高校生だからこそできることをメンバー全員で真剣に話し合い、それぞれが自分の言葉で自信をもって想いを伝えられるように活動を進めました。ふくしまでの震災後の学びを他地域に伝えながら、仲間を増やし、世界規模の新しい教育プラットフォームを構築しました。

## 事業概要

本ワークショップは、これまでの取り組みを踏まえ、福島の高校生が県内の被災地を訪れ、福島の状態を放射線防護の視点で学ぶことを目的とする。今年は福島高校、ふたば未来学園高校、安積高校の3校で実施した。昨年度に引き続き、学んだことをわかり易くまとめ、高校生の視点で、震災後の福島復興の課題を、県外・海外に発信する。

今年もコロナ感染症拡大防止のため、県外・海外の高校生の来県や、渡仏しての発信は実現できないが、令和4年5月に延期された高校生国際会議(オンライン)で海外に向け発表予定。

## 取組内容

- ① 双葉大熊浪江町見学、飯館村長泥地区見学、福島第一原子力発電所見学などを行い、廃炉や福島復興などについて体験的に学んだ。
- ② 学んだことを元に1月末に発表会を行い、見学会でご指導いただいた方々と、あらためて福島の課題について討論を行った。
- ③ 取り組みのようすは、今年も福島民報新聞に掲載される予定。5月にはフランスの高校生との発表会も実施予定である。



## この事業のポイント

## この事業のポイント

震災後の福島復興の進捗と課題について、高校生が現地に赴き直接話を聞くことで、学び発見したことを発信しています。コロナ感染症拡大防止のため、県外・海外高校生の来県はありませんでしたが、オンライン発表会などを通して、県外・海外へも福島の姿を発信していきます。

## 事業概要

当町に所在する福島県立小野高等学校と沖縄県立八重山農林高等学校は平成28年に友好協定を締結し、両校の生徒の交流を続けてきた。依然として復興段階にある「ふくしま」の現状を県外に伝えるため、交流を継続し、事業を通して県内農産物の安心・安全を広める。

併せて、参加する生徒の郷土愛を育み、地域の未来を担う人材育成の機会とする。

## 取組内容

友好交流事業を実施し、環境も文化も異なる地域の高校生同士が相互理解と親睦を深める機会とすること及び震災から復興に向かう「ふくしま」の実態について、小野高校の生徒が学び、発信してもらうことを目的とする。

- 新型コロナウイルス感染症の影響により、直接訪問は困難であるため、オンライン交流を実施。
- 県産(町産)農産物のおいしさ、安心・安全を県外に発信。
- 小野町産農産物に石垣市産農産物等を組み合わせ、新たな6次化商品開発、町の特産品化へ向けた検討。
- 販売実習により、生徒自身が農産物等を紹介し、実際に食べてもらうことで福島県産(小野町産)農産物のおいしさと安心・安全についてPRする。



## この事業のポイント

## この事業のポイント

商品開発等に向けたオンライン交流の中で、生徒自身が地元産農産物をPRするため、改めてその魅力を学び、感じる機会となり、県外に発信することと併せて地元愛の醸成を図ることができた。

生産者、加工・販売に取り組む事業者、6次産業化の実践者等を講師に迎え、高校生ならではのアイデアにプロのアドバイスが加わることで、クオリティの高い商品開発につながった。

販売会では予想を超える反響があり、今後連携事業者での通常商品化等を検討している状況。

## 事業概要

東日本大震災からの復興に向けて進む福島の10年間を、被災地を訪れたり復興に向けて尽力する方々の話を聞いたりとすることで理解を深め、今の福島を正確に把握する。その際、郡山市と連携しながら、ドイツ連邦共和国のエッセン市のGymnasium an der Wolfskuhleの学生とのオンライン交流を通して福島の現状を発信する。また、駐日ドイツ大使館や福島県とも関わりのある企業・組織を訪問し、福島の現状を発信する。なお令和3年度はSDGsのゴール7(エネルギー分野)について、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」とも関わらせながら探究を進める。年度末には実践の成果をまとめ、校内外で報告し、校内では今後の福島復興への意識の高揚、校外に対しては風評被害の払拭の一助とする。

## 取組内容

- ① 東日本大震災から11年が過ぎた福島における課題と現状を、身近な地域や県内の各被災地のフィールドワークを通して探究し、「ふくしまの今」として英語でまとめた。また、本校の紹介リーフレットの英語版を作成した。
- ② 「ふくしまの今」を身近な地域だけでなく、Gymnasium an der Wolfskuhle学校の生徒や駐日ドイツ公使、株式会社エヌアールダブリュージャパンなどに発信した。
- ③ 本来であればドイツ渡航をしての交流活動をしたかったが、新型コロナで叶わなかったため、今年度の実践をふまえてつづ来年度に行きたい。



## この事業のポイント

## この事業のポイント

ドイツに渡航しての交流は叶いませんでしたが、ドイツの高校生とのオンライン研修や代替研修での各施設訪問を通して、生徒の国際的感覚が育ち、国内外に対し復興に向けて進む「ふくしまの今」を発信できる事業となりました。



**事業名****福島県立ふたば未来学園高等学校演劇部、  
演劇部 OB・OG協働公演『数直線2021』****福島県立ふたば未来学園高等学校  
演劇部****事業概要**

- ①2016年、2017年にふたば未来学園高等学校演劇部が自身の実体験をもとに台本を制作し、福島・東京など様々な場所で上演した舞台『数直線』を、原子力災害から10年を迎えたこの機会に、OB・OGが講師となりながら本校在校生と協働して2021年版にリメイクする。
- ②『数直線2021』を映像撮影して海外翻訳字幕を載せた映像を制作し、オンラインで上演する。

**取組内容**

コロナ禍により一度も対面による稽古は出来なかったが、オンラインでWSをしながら演劇部OB・OGとの交流を深め、東日本大震災について意見交流を行った。作品『数直線2021』の上演に関しては、対面での上演を中止し、コロナ禍の今だからこそその表現の形を追求した。結果、脚本を一から練り直し、映像作品を作った。これから配信をし、視聴者からのフィードバックをもらう予定である。12月には、福島を訪問していた埼玉県不動岡高校の生徒たちと演劇を通して震災について考えるWSを実施した。

**この事業のポイント****この事業のポイント**

もともと予定していた演劇公演がコロナにより実施が難しくなりましたが、そこで諦めず、コロナ禍の今だからこそできる表現を追求しました。OB・OGと私たち現役生が、それぞれの場所で、震災と向き合いながら、今考えていることを共有しました。初めての映像作品ということで、撮影や編集が難しかったですが、見応えのあるものが出来たと思います！

**事業名****相馬ながれやま踊りJuniorの会による  
福島っ子の元気発信事業****相馬ながれやま踊り  
Juniorの会****事業概要**

伝統芸能として長年続いてきた「相馬流山踊り」だが、東日本大震災という未曾有の天災により継承が途絶えようとしている。東日本大震災での経験や復興への歩み・苦労を知ることにより、より一層、南相馬っ子たちがこの伝統芸能を継承していく気持ちを強く持ってもらうようにしていきたい。また、関西・中国地方・関東へと出向いて受け継いだ伝統芸能を披露することにより、震災から10年を経た福島の今&元気を発信していきたいと考える。

**取組内容**

700年の歴史がある「相馬流山踊り」をコロナの終息を願い、伝統文化の灯火を絶やさないう、以下の会場で演舞を行いました。

8月 7日	廿日市市	巖島神社
8月 8日	京都市	知恩院三門
8月 9日	奈良市	東大寺大仏殿中門
10月23日	下郷町	大内宿本陣前
10月24日	日光市	日光東照宮

**この事業のポイント****この事業のポイント**

コロナ禍にあっても活動は続けなければならないと考えています。コロナ禍を通じて学んだことは「文化は生き物」であったということでした。生き続けるためには継続より他にないとも学びました。

## 事業概要

白河市を拠点とする高校生グループ『裏庭編集部』が、東日本大震災について取材・発信することで、巨大な厄災の経験のある広島県内の高校生や語り部との交流をはじめをきっかけとする。震災の記憶が風化しつつある中通り出身の高校生が、双葉郡で取り組まれている復興や伝承への取り組みを学ぶと共に、福島出身の高校生として、他地域・他世代との対話の手法や、分断ではなく協働を実現するための発信方法について実践的に学び、発信する。

## 取組内容

- 白河市内での取材(大塚相馬焼 いかりや窯様)
- 双葉町双葉高校周辺見学(アテンド AFW吉川様)東日本大震災災害伝承館の見学
- 情報発信についての研修(一般社団法人ヴォイス・オブ・フクシマ久保田様)
- 広島県立大崎海星高校生との交流
- 広島平和祈念資料館訪問
- social book café ハチドリ舎訪問交流
- 取材・訪問成果の冊子化・配布



## この事業のポイント

## この事業のポイント

研修→取材→発信・交流、と、学ぶだけ、座学だけではなく、実際に自分たちが取材のために足を運び、その経験を言葉にすることを繰り返していること。また、特定の高校生だけではなく、活動メンバーも3つの高校にまたがっている他、他県の高校生とも交流を行っている。完成した冊子は、広く福島県内外に配布する予定である。

## 事業概要

中学生による地域探究活動や映像制作を通して、地域の文化と伝統を見つめ直すことにより、ふるさとの良さを再発見し、広野町の未来と地域の復興に貢献できる子どもたちを育成する「ふるさと創造学」に取り組む。

その際、子どもたちがふるさとの「ひと・もの・こと」を直に感じ「その魅力をだれにどう伝えるか」「自分の思いをどう表現するか」試行錯誤する過程を大切にする。子どもが自らの主体性を発揮しながら、専門家とかかわり、自分の思いを形にできるようにしていく。子どもの思いと教師の願い、専門家の経験等が生かされながら、各学年の探究活動を創り上げることができるようにする。

## 取組内容

- 第1学年は、他県出身の生徒が多く在籍している。出身地と広野町の様子を比較しながら広野町の魅力を探る。(探る)
- 第2学年は、広野町に住んでいる人、広野町で働いている人たちが伝えたい思いをリサーチ。(伝える)
- 第3学年は、これまでの探究を生かし、広野町の課題解決のためのアイデアを考え、ふるさとの未来を追究。(創る)



## この事業のポイント

## この事業のポイント

生徒たちが「ふるさと広野」のよさを再発見し、未来に向けて歩み出せるよう、自ら進んで地域の方々とかかわり、自ら考え、創造する活動を推進している。

大人にはない「中学生ならではの“感性”」を生かし、友だちと試行錯誤しつつ、外部講師や地域住民とかかわりながら、活動を創り上げる点が大きなポイント!

子どもたちの活動を支えてくださった皆様、ご協力ありがとうございました。